# 新任教員・昇任教員紹介

## 新任教員

2019年9月13日付け

歯学部 助教
（口腔構造・機能発育学系〈歯科矯正学〉）

**山口 優**（やまぐち まさる）

北海道医療大学歯学部歯学科卒業。北海道医療大学大学院歯学研究科博士課程修了。北海道大学研修歯科医、北海道医療大学歯科クリニック臨床助手等を経て本学就任。

## 昇任教員

2019年10月1日付け

薬学部 准教授
（衛生薬学〈環境衛生学〉）

**寺崎 将**（てらさき まさる）

北海道大学水産学部水産化学科卒業。北海道大学大学院水産科学研究科生命資源科学専攻博士後期課程修了。独立行政法人食品総合研究所、国立がんセンター研究所、共和コンクリート工業株式会社海藻技術研究所、北海道大学大学院水産科学研究院等を経て本学就任。水産科学博士。

2019年11月1日付け

薬学部 助教（分子生命科学〈免疫微生物学〉）　**森 宏**（もり ひろし）

# Message 定年退職される先生からのメッセージ

歯学部 教授
**家子 正裕**

2020年3月をもちまして定年退職することとなりました。1997年4月に歯学部内科学講座の助教授（現准教授）として採用されて以来、実に23年間本学歯学部でお世話になりました。

市立札幌病院免疫血液内科（現在は免疫内科と血液内科に分かれています）から赴任しましたが、医学から歯学に移るに当たっては、「果たして私に務まるかどうか」心配で心細かったのを思い出します。自分としては相当の覚悟で赴任しましたが、幸い前任の安河内太郎名誉教授（当時は保健管理センター教授）や歯学部の多くの先生（特に口腔外科の有末眞名誉教授、柴田考典教授）に助けられながら、何とか診療、教育、研究と徐々に軌道に乗せることができました。1999年12月に教授に昇格させていただき、多くの方々のご配慮により教室に准教授、講師の先生を迎えることができ、充実した環境で教育、研究に従事することができました。「全身疾患を理解できる歯科医師の育成」を目標として行ってきました。2005年頃から歯科医師国家試験でも内科学的な知識が重要となりましたが、本学歯学部に少しでも貢献できていたならば幸いです。

この23年間で附属病院（後にクリニック）運営、保健センター運営など様々なことに取り組む機会を与えていただきました。その貴重な経験は、今後の私の人生の糧であり指標となります。多くの教職員、学生の皆様との思い出も多く、懐かしく思い出されます。少子化に伴い教育現場も複雑で難しい世界になってきています。これからは、この新しい世界に対応できる若者の時代と思っています。彼らが活躍できる環境が整うことを心より期待しています。

人生の1/3を過ごさせていただきました本学に心より感謝するとともに、皆様方が益々ご活躍され、本学が更なる発展を遂げられることを心よりお祈り申し上げます。

歯学部 教授
**坂倉 康則**

本学歯学部口腔解剖学第一講座に助教授として赴任したのは1994年4月。北海道医療大学として改称した年で、歯学部の学生さんが元気よく挨拶してくれたことがとても印象的でした。在職26年間を振り返りますと、当時の教授の先生方は大変個性豊かで、近寄り難い威厳さえ感じました。赴任当時は学生数も多く、第2学年の授業のみを担当し、ゆとりのある良き時代でしたが、共用試験の導入とカリキュラム改革、歯科医師国家試験の難化と国試対策の強化、入学定員と教員の削減など赴任当時にはとても考えも及ばない歯学部の激動の時代を駆け抜けてきました。学生時代に経験した大学という最高学府での教育は系統立てられた学問へ誘うものでしたが、私学の主命であると同時に歯学教育の激変とともに、最短で資格を取得し社会に貢献すべく要約された教育へと変貌せざるを得なくなったことは大変寂しい思いすらします。解剖学という学問の論理性や人体解剖学実習での発見の素晴らしさを教授できなくなったことには悔いが残ります。しかしその一方で、人体解剖学実習や見学実習を通して、人の死に対する畏敬の念を育むことに多少なりとも貢献できたと、我ながら自負しています。解剖学教室は歯学部や他学部・附属専門学校の授業担当だけにとどまらず、献体登録者との信頼関係の構築や白菊会の運営、遺体処置と管理などの献体業務も担っています。献体業務を間違いなく遂行することを通して自己を律することが、学生の倫理教育に説得力を持つと考えてきました。その任を全うできますことに安堵しています。

本学に赴任以来、様々な職責を全うできましたことは退職された、あるいは現職の多くの先生方や職員の方のご指導ご支援に支えられたお陰です。今日を迎えることができますことは感謝の念に堪えません。今後とも歯学教育に携わりながら、多少なりとも恩返しさせていただく所存です。有り難うございました。

看護福祉学部 教授
**志渡 晃一**

2000年4月、北海道大学医学部公衆衛生学教室から本学看護福祉学部に助教授として赴任しました。本年3月末で定年を迎えることになりましたのでちょうど20年間勤務させていただいたことになります。これまで、多くの皆様に支えられながら無事定年まで勤めることができましたこと、心より感謝申し上げます。

振り返りますれば、当時の生命基礎講座の三宅浩次教授から推薦を受け「主に大学院の教育に期待します」とのお言葉を胸に刻み決意を新たに赴任してきたことが懐かしく、また、気恥ずかしく思い起こされます。2003年4月から大学院教授を拝命し、三宅先生の後任の西基教授のご教示を受けながら17年間「福祉疫学講座」を標榜して参りました。修士・博士課程の諸君とともに共同研究し、20余りの学位論文の完成と研究論文の発表に携わることができました。「福祉疫学講座」の使命とする「予防福祉」の推進に少しは貢献できたものと自負しています。

学部では「公衆衛生学」「社会福祉調査法」などの科目を担当し、卒業ゼミでは50名以上の学生と関わることができました。学生に対する先輩諸先生の懇切な熱い指導を横目に「大学は教育の場であって治療の場ではない」などと生意気な意見を言っていた自分が愚かで情けなく感じるようになった時、すでに相当の時間が経過していました。学生こそがキラキラと輝く宝石であり、財産でした。今改めて、恵まれた大学生活であったとしみじみとかみしめている次第です。

教職員の皆様、学外連携施設・機関関係者の皆様に支えられて、この20年間を過ごして来られたことを有り難いことと感じております。末筆ながら、皆様の今後の更なるご活躍と、本学の益々のご発展をお祈り申し上げます。長い間本当に有り難うございました。

2019年12月1日付け

リハビリテーション科学部 講師
（作業療法学科）

**児玉 壮志**（こだま そうし）

札幌医科大学保健医療学部作業療法学科卒業。札幌医科大学大学院保健医療学研究科理学療法学・作業療法学専攻博士課程修了。北海道社会事業協会岩内病院、医療法人陽和会南山病院、財団法人紫雲会横浜病院、医療法人社団高台病院等を経て本学就任。作業療法学博士。

2020年1月1日付け

予防医療科学センター 准教授
（医学部門）

**河野 豊**（かわの ゆたか）

札幌医科大学医学部卒業。札幌医科大学大学院医学研究科内科系専攻内科学（第4）博士課程修了。札幌中央病院、北海道消化器科病院、札幌医科大学第4内科、米国ボストンのダナ・ファーバー癌研究所（Department of Medical Oncology）等を経て本学就任。医学博士。

2020年2月1日付け

歯学部 助教（口腔機能修復・再建学系〈歯周歯内治療学〉）　**松本 光生**（まつもと こうせい）

With heartfelt thanks.

看護福祉学部 教授
**森田 勲**

## 音別と当別での教員生活を振り返って

私が本学の教員となったのは、1978年の4月です。最初に薬学部が1974年に開設され、その4年後に歯学部が開設されたのと同じタイミングです。当時は、1991年に大学設置基準が大綱化される前で、体育実技と理論は必修科目となっていまして、歯学部の開設に合わせて増員が図られたためでした。1985年の9月に当別に移転するまで、7年間を音別の教養部で過ごしました。音別キャンパスは国道38号線を挟んで校舎と寮や教職員の住居などがあり、音別町と白糠町の間に突然と現れるコミュニティーで教員生活を送りました。

学生も教員も、通称「大学村」での授業と生活の繰り返しで、欠席回数が多くなった学生は寮に迎えに行ったり、買い物を頼まれたりで、公私にわたった付き合いが続きました。したがって、今とは違って学生全員の名前を覚えていましたし、あまりやることもないので、バスケットボールを中心としたクラブ活動を随分行いました。ほとんどの教員が動けましたので、無謀にも硬式野球部やサッカー部などとのゲームも幾度となく行いました。冬には学生と一緒にそりすべりやスケート、敷地内にあった人造湖でワカサギ釣りを行うなど懐かしい限りです。

当別に移転してからの最初の11年間は、授業や体育関係の施設の構築に追われたことに加え、専門課程の楔形カリキュラムが展開されることになり、教養部、基礎教育部と組織の名称が変更する中で本学における教養教育の意義が問われるタイミングでもありました。1993年には看護福祉学部が新設され、2000年以降は教養教育担当の教員が各学部に分属・併任することになりました。私は看護福祉学部への配属が決まり現在に至っています。この間、ほぼ学生委員としてかかわり、2008年から8年間は学生部長として、学生生活を円滑に過ごすための指導や助言などの協力をさせていただきました。このほか、体育関係の施設管理責任者や全学教育推進センター長としての4年間など、多くの教職員の皆さんに支えられてなんとか職務を全うさせていただきました。最後に事務局をはじめ卒業生や現役学生の皆さん、施設・清掃関係の皆さんなど本学関係者の方々に感謝を申し上げ、メッセージとします。

リハビリテーション科学部
教授
**青木 光広**

## 60歳で北海道医療大学に赴任して

早いもので、2015年4月に北海道医療大学リハビリテーション科学部に赴任してから5年が経過し、2019年5月で65歳となりました。理学・作業療法士の学部教育に如何に前向きに取り組むかについて、現職のリハビリテーション科学部教授や学部長と議論を重ね、講師や助教と協力して自分なりに教育の理想像を描きつつ実践しようと試みて参りました。まだまだ道半ばで、担当する講義を一日に2講続けて行う体力が減っているこの頃の自分に気が付き始めています。また、理学・作業療法学科に2名在籍していた医師が1名退職し、現在は私1名のみですので極めてさみしい思いがいたします。近年、リハビリテーション科学部に改組された言語聴覚療法学科には数名医師が在籍しますが、physicalな教育を担当するという観点から、多少趣の異なった仲間と感じています。1年次の医学概論、2年次の整形外科学、3年次の画像診断学は理学・作業療法共通科目、3・4年次の理学療法ゼミナールを2名から7名を担当し、また、大学院生を現時点で5名抱えて土曜日曜にかかわらず、彼らと実験をともにして論文執筆に携わってきました。特に大学院生の研究計画や論文執筆では、添削はネットでの添付書類の行き来で行い、例えば夜9時に院生から送られてきた論文原稿はその日のうちに添削して朝1～3時までに送り返します。大学院生を休ませないで継続して論文執筆に専念させるこの力技を、1名ではなく常に数名に対して駆使してこれまでやってきました。忙しいのですが、相当に充実した教育人生であったと振り返っています。おかげさまをもちまして、このような教育を経験した卒業生は、同じことを部下に試みているようです。

最初からはこれほど多くかかわることを予定していなかったのですが、北海道医療大学病院での整形外科外来診療とリハビリテーション室の運営も、赴任1年目から始めていました。赴任後2年目で理学療法士が1名、3年目2名、4年目で3名就業となり、順調な運営が行われ、安堵しています。整形外科年間収益はリハビリテーションも含め年間3,000万円から4,000万円、5,000万円、6,000万円、現在は7,000万円と右肩上がりで増加しています。来年は8,000万円の収益を予測していますが、私の体力がそろそろ頭打ちになってきていますので、どこまで続くか分かりません。

今のところ、外見も60歳前に見えるようですし、生活習慣病はありますが、頸動脈と腹部エコー、心電図は正常で悪性腫瘍、糖尿病、動脈硬化もなく気力もまだ維持されています。医師会等では社会医療に関する役職も担い、社会保険審査会診療報酬支払基金審査委員、札幌市医師会医事紛争処理委員会委員、北海道立心身障害者総合相談所補装具判定員などを任されて、時間外を相当量消費している事態になっています。働き方改革とは全く逆の方向にすすんでいますが、本学大学院生が開いてくれる懇親会や学部生との懇親会、同窓会セミナーでの会合、少年野球肘検診の開催など、さらに前任地であった札幌医科大学保健医療学部での大学院生や学部生とのディスカッション、メディカルスタッフ解剖セミナーでの懇親、北海道理学療法士会講習講師など、リハビリテーション領域でお座敷がかかりますので自分としては満足しています。予定している2年間の特任教授在籍で在学中の担当大学院生を卒業させて、今後のことを見据えていこうと考えています。毎日早起きして出勤し、教務や実験や研修会と言って土日祝日も朝から出ていく儘な私を支えてくれている妻や子供たち、あるいは大学院生、学部事務員や教員、病院職員の方々にこの場を借りて感謝の気持ちを述べたいと思います。心よりありがとうございますと申し上げます。